

さん のう い せき  
山王遺跡7

—山王遺跡第8次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1283集

2016

福岡市教育委員会

さん のう い せき

# 山王遺跡7

## —山王遺跡第8次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1283集



調査番号 1424  
遺跡記号 SNN-8

2016

福岡市教育委員会

題字は、春日市小倉在住の日高芳子氏の揮毫による



1) 調査区全景(北から) CG合成



2) 6号住居(東から)



## 序

はるか二千年の昔から大陸文化の窓口として栄えた福岡市は、二十一世紀のアジアに開かれた都市として、更なる発展を目指してさかんに都市開発が推し進められています。それに伴ってやむなく失われる埋蔵文化財については、将来にわたって記録を保存するための発掘調査をおこなっています。

本書は、社屋の建設に先立って実施した山王遺跡第8次調査の発掘調査報告書です。

今回の発掘調査では、弥生時代後期と古墳時代後期の竪穴住居や土壙などが発見されました。殊に、弥生時代後期の大型の竪穴住居は、三方の壁下にベッド状の遺構が巡り、その対面の壁下には出入り口部の梯子を支えた柱穴が検出されました。この大型の竪穴住居の発見は、集落内における役割を考える上で貴重な発見となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には、地権者をはじめ多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成28年3月25日

福岡市教育委員会

教育長　酒井　龍彦

.....れいげん.....

1. 本書は、福岡市教育委員会が福岡市博多区山王二丁目43番2で計画された事務所および倉庫兼作業所の建設に先立って、平成26（2014）年10月6日～11月26日までに発掘調査した山王遺跡第8次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した方位はすべて磁北方位である。
3. 遺構は、堅穴住居をSC、土塁をSK、炉をSH、ピットをSPと記号化して呼称し、その後にすべての遺構を番号で01からナンバーを付した。
4. 本書に掲載した遺構と遺物の実測および製図は小林義彦があたったが、現況図の製図は田中朋香の協力を得た。
5. 本書に掲載した遺構と遺物の写真は、小林が撮影し、全景写真は東・中央・西に3分割して撮影した各区の写真をCGで合成した。
6. 本書の執筆・収集は小林が行った。
7. 本書に係わる遺物と記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

調査番号：1424	道路略号：SNN-8	分布地図番号：037-2379
調査地籍：福岡市博多区山王二丁目43番2		
工事面積：257m <sup>2</sup>	調査対象面積：228m <sup>2</sup>	調査実施面積：165m <sup>2</sup>
調査期間：2014年10月6日～11月26日		

# 本文目次

序	
I. はじめに	1
1. 発掘調査にいたるまで	1
2. 発掘調査の組織	1
3. 立地と歴史的環境	3
II. 調査の記録	7
1. 調査の概要	7
2. 弥生時代の調査	8
1) 壺穴住居	8
2) 土 壁	15
3. 古墳時代の調査	15
1) 壺穴住居	15
2) 土 壁	18
4. そのほかの遺構と包含層出土の遺物	20
1) 炉	20
2) 包含層の遺物	20
III. おわりに	20

# 挿図目次

Fig. 1 周辺遺跡分布図(1/25,000)	2
Fig. 2 山王遺跡位置図(1/4,000)	4
Fig. 3 山王遺跡第8次調査区位置図(1/1,000)	5
Fig. 4 山王遺跡第8次調査区周辺現況図(1/400)	6
Fig. 5 遺構配置図(1/100)	7
Fig. 6 弥生時代の遺構配置図(1/200)	8
Fig. 7 1・3号住居実測図(1/60)	9
Fig. 8 3号住居出土遺物実測図(1/2・1/4)	9
Fig. 9 6号住居実測図(1/60)	10
Fig. 10 6号住居炉実測図(1/30)	11
Fig. 11 6号住居出土遺物実測図1(1/4・1/6)	12
Fig. 12 6号住居出土遺物実測図2(1/1・1/2・1/3)	13
Fig. 13 23・26号住居実測図(1/60)	14

Fig.14	23号住居出土遺物実測図(1/2) .....	15
Fig.15	24号土壤実測図(1/30) .....	15
Fig.16	古墳時代の遺構配置図(1/200) .....	16
Fig.17	2号住居実測図(1/60) .....	17
Fig.18	2号住居出土遺物実測図(1/4) .....	17
Fig.19	4・27・34号住居実測図(1/60) .....	18
Fig.20	4号住居出土遺物実測図(1/4) .....	18
Fig.21	27号住居出土遺物実測図(1/1) .....	19
Fig.22	5・13・17号土壤実測図(1/30) .....	19
Fig.23	5号土壤出土遺物実測図(1/4) .....	20
Fig.24	包含層出土遺物実測図(1/4) .....	20

## 表目次

Tab.1	山王遺跡発掘調査一覧表 .....	5
-------	-------------------	---

## 図版目次

卷頭図版	1) 調査区全景 (北から) CG合成	2) 6号住居 (東から)
PL. 1	1) 調査区全景 (東から) CG合成	2) 調査区東側全景 (東から)
PL. 2	1) 調査区中央部全景 (東から)	2) 調査区西側全景 (北から)
PL. 3	1) 1~4号住居 (東から)	2) 1号住居 (北から)
PL. 4	1) 3号住居 (北西から)	2) 6号住居 (北から)
PL. 5	1) 6号住居遺物出土状況 (北から)	2) 6号住居遺物出土状況 (東から)
PL. 6	1) 6号住居貼床断面 (北から)	2) 6号住居炉土層断面 (東から)
PL. 7	1) 23・26号住居 (東から)	2) 23号住居 (北から)
PL. 8	1) 23号住居貼床断面 (西から)	2) 24号土壤 (北から)
PL. 9	1) 2号住居 (北から)	2) 4号住居 (北から)
PL.10	1) 4号住居遺物出土状況 (北から)	2) 23・27号住居 (東から)
PL.11	1) 27号住居 (北から)	2) 26・24号住居 (東から)
PL.12	1) 5号土壤 (北から)	2) 13号土壤 (西から)
PL.13	出土遺物 1 (縮尺不同)	
PL.14	出土遺物 2 (縮尺不同)	

# I. はじめに

## 1. 発掘調査にいたるまで

山王遺跡は、福岡平野の東縁を蛇行しながら北流する御笠川下流域の左岸に沿って立地し、その西には、觀音山の小山塊から須玖岡本を経て井尻・五十川・那珂・比恵へと続く春日丘陵が続いている。この山王から比恵・那珂一帯は、近年まで都市近郊のどかな田園風景が広がっていた。しかし、急速な郊外の市街化で丘陵上には一面に住宅や商業ビルが建ち並び、旧地形の面影はない。

筑紫通り沿いの博多駅南や山王地区もその例に漏れず、JR九州の博多駅に近い利便性もあって幹線道路沿いは、中高層の商業ビルを中心とする町並みに変容しつつある。

このような中、博多区山王二丁目43番2に事務所および倉庫・作業所の移転建設が計画され、埋蔵文化財の有無についての照会が埋蔵文化財審査課に提出された。この地は、山王遺跡として周知化された埋蔵文化財の包蔵地内にあり、7地点に及ぶ周辺調査の成果から弥生時代から古墳時代の集落域の広がりが予測された。そこで平成26(2014)年8月25日に確認調査を実施した。その結果は、当初の予測を裏付けるものであり、基礎の構造的事由により建築物によって破壊される範囲を緊急に発掘調査して記録保存を図ることとなった。

発掘調査は、平成26(2014)年10月6日より始め、密集して広がる弥生時代後期から古墳時代後期の堅穴住居10棟や土壙などを検出して11月26日に無事終了した。この貴重な成果は、地権者のご理解やご協力と指導、助言を頂いた先輩諸氏および発掘調査に従事した方々の労苦に負うところが大きい。ここに記して改めて感謝の意を表します。なお、発掘調査は、補助金適用要項に基づいて国庫補助事業と民間受託事業とを併せて実施した。

## 2. 発掘調査の組織

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 文化財部埋蔵文化財調査課

埋 蔵 文 化 財 調 査 課 長	常松幹雄
-------------------	------

埋蔵文化財調査課調査第1係長	吉武 学
----------------	------

埋蔵文化財調査課調査第2係長	榎本義嗣
----------------	------

調査庶務 埋蔵文化財審査課管理係 横田 忍

調査担当 埋蔵文化財調査課調査第1係 小林義彦

技能員 谷 直子

調査・整理作業 伊藤美伸 浦崎てい子 坂梨美紀 高瀬美智子 知花繁代 土斐崎孝子 遠山歎  
西田文子 濱フミコ 日高芳子 北條こず江 増田ヒロ子 松下さゆり 田代典子  
森田祐子 山本加奈子 渡部律子

発掘調査や資料整理にあたっては、地権者をはじめ施工業者や谷直子氏の協力を得た。その協力に謝意を表するとともに本報告に十分に生かせなかつたことを深くお詫びする次第である。

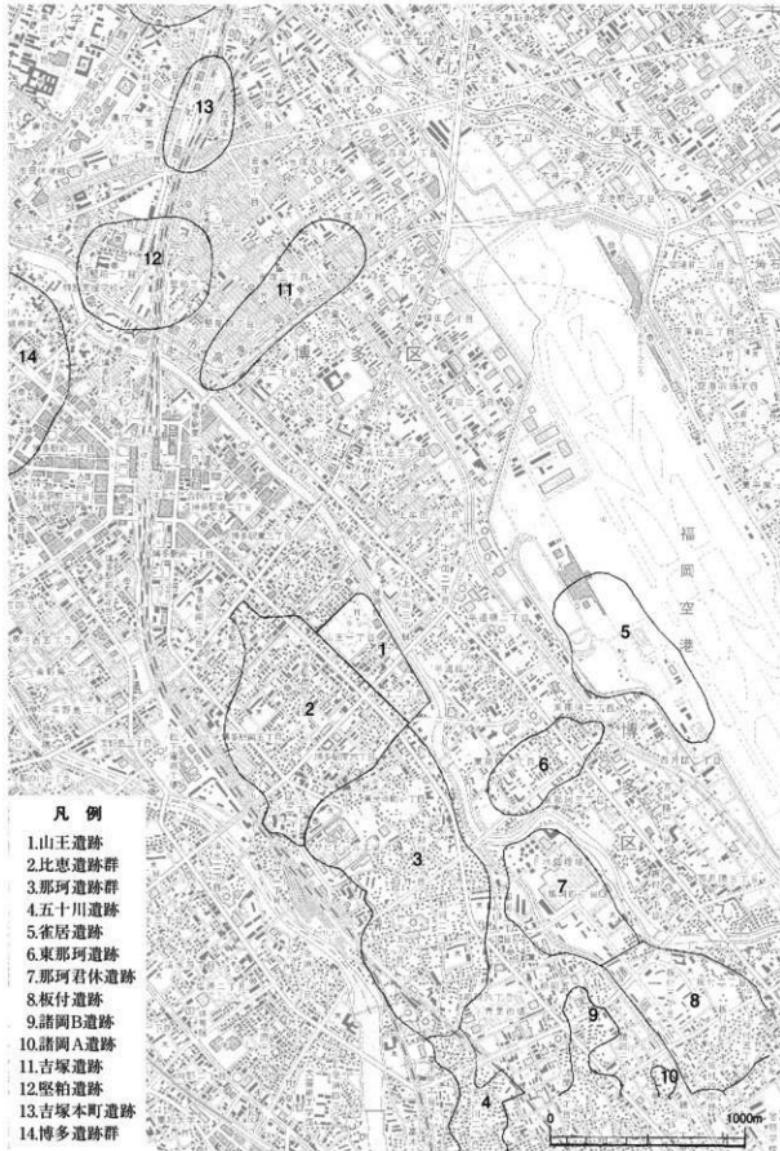


Fig.1 周辺遺跡分布図(1/25,000)

### 3. 立地と歴史的環境

山王遺跡のある福岡平野は、三方を三郡山系や背振山系からのびる小山塊に囲まれ、北は玄界灘を臨む博多湾に面した沖積平野である。この福岡平野の中央部には、小山塊の裾野に源を発する御笠川と那珂川が山裾に沿って緩やかに蛇行しながら北流して博多湾に注いでいる。この御笠川と那珂川の間には、親音山や牛頭から断続的に長くのびる洪積台地が形成されている。春日丘陵と総称されるこの洪積台地は、花崗岩風化礫層を基盤とし、その上層部には阿蘇山の火碎流によって形成された八女粘土層と鳥柄ローム層が堆積している。この春日丘陵は、奴国王の王墓地とされる須玖岡本から井戸、五十川を経て那珂、比恵へと続いて博多湾の海岸砂丘に北面しており、それらの丘陵上には、後期旧石器時代から中世にかけての遺跡が連綿と複合的に展開している。殊に、弥生時代から古代にかけては濃密な分布状況を示している。

山王遺跡は、この春日丘陵最北端の標高5～10mの洪積台地上に位置する比恵遺跡群とその東を北流する御笠川の左岸に挟まれた低位段丘上に立地しており、あたかも比恵遺跡群と対峙するように位置している。しかしながら、その境界は水城東門から延びるいわゆる「水城東門ルート」の切り通しを便宜的な境界として分離しており、本来的には御笠川の左岸にむかって延びる比恵遺跡群東縁の低丘陵と考えられる。便宜的に区分した山王遺跡から西の比恵遺跡群とその南に続く那珂遺跡群は幾つかの丘陵鞍部を挟んで同じ丘陵上に連なり、御笠川と那珂川の開析によって形成された樹枝状の複雑な弯入谷や起伏がある。

この山王遺跡から比恵・那珂遺跡群では、1938(昭和13)年の区画整理時に発見された環濠集落の調査以来、これまでに300地点に及ぶ発掘調査が実施され、台地上において連綿と営まれた各時代の集落や墳墓地の様相や開析谷に構築された灌漑施設等の様相が次第に明らかになりつつある。この山王遺跡や比恵・那珂遺跡群を時系列的に概観すると、人跡の初現は後期旧石器時代に始まり、比恵遺跡群18次調査区で同期の遺物が検出されている。那珂遺跡群でも、丘陵南東縁の38・41次調査区などでナイフ形石器や彫器、剥片などの遺物が出土しているが、いずれも散逸的な分布に過ぎない。縄文時代も晩期前半までは、石器や石匙、網文土器片などが断片的に出土しているのみで遺構に伴った明確なものはないが、突帯文期に至ってはじめて遺構が出現する。弥生になると、前期にかけて丘陵縁辺の低位な段丘を中心に集落域が形成され、高所には堅穴住居や貯蔵穴群が確認され、幾つかの集團によって群構成されている。この傾向は、那珂遺跡群でも同様で北端部の37次調査区や中央部の67次調査区の高所では集落域を大溝で囲んだ環濠集落が検出されている。この前期後半～中期には周辺沖積地の開削によって集落域は丘陵の縁辺部から尾根上へと次第に拡大していく。中期後半から後期には、比恵・那珂遺跡群とも集落域は爆発的に増加し、丘陵上の全域が集落域と化す感がある。銅剣や銅弋・銅矛などの鋳型や中子なども出土し、青銅器を生産する工人集團の工房群が台地の尾根上に現れる。また、集落域の周辺には墳丘墓をはじめとする甕棺墓群も造営される。比恵遺跡群の6次調査区では細型銅剣を副葬した甕棺墓を内包する中期初頭～前半の墳丘墓が形成される。那珂遺跡群の北側でも中期中葉～後期の墳丘墓が形成されている。一方、丘陵の東側に拡がる沖積地の1次調査区では、中期中葉～後期前半の大規模な水田が確認されている。

古墳時代になると、台地の中央部に福岡平野で最古の前方後円墳である全長85mの那珂八幡古墳が造営され、その木棺内には三角縁神獣鏡が副葬されていた。これに統いて6世紀後半には、那珂八幡古墳の北500mの台地上に東光寺剣塚古墳と剣塚北古墳の2基の前方後円墳が造営される。このうち、東光寺剣塚古墳は、三重の周溝をもつ全長140mの筑前地域で最大級の前方後円墳である。また、近年丘陵上の各所で円墳等の周溝が発見され、丘陵上には開発で失われた古墳群が存在していた。

一方、この時期の集落域は、5世紀後半まで一時的な衰退傾向が窺われるが、これを境に再び大規模な集落形成が展開をはじめる。6世紀代には、堅穴住居と掘建柱建物からなる集落域が丘陵の低位を避けた高所に幾つかのまとまりをもって広がるが、比恵遺跡群では丘陵の北半部、那珂遺跡群では中央部の西側域に集落が展開しない空間域がある。また、集落の展開するエリアでは、遺構間の重複が著しく比較的長い期間に亘って同一のエリアで集落域を構成したものと考えられる。また、6世紀後半～7世紀前半には、企画性の高い柵列に囲まれた大規模な掘立柱建物の造営が丘陵の各所ではじまる。これらの建物群は、既存の集落域から離れた丘陵の高所に造営される。比恵遺跡群の7・8・72・109・125次調査区では集落域と重複しているが、これは集落域とは共存せず、集落の廃棄後に造営を始めている。これは企画性の高い建物群が既存の集落域から隔離したものである証左であり、官衙的な機能を有する建物群であることを示しているとも云える。那珂遺跡群でも同様の建物群が検出されており、何らかの有機的な関連性も想起される。これら官衙的な様相を帶びた企画性の高い建物群は、記紀に記された「那津官家」との関わりが強く指摘されている。

奈良時代以降になると、集落域は急速に縮小し、遺構の中心域は那珂遺跡群に移る。この時期、那珂遺跡群内では真北にのびる直線的な溝が開削され、その溝内からは瓦や硯などがまとまって出土していることから都衙や寺院などの存在が想起され、中心的な拠点的集落として提えることができよう。

また、水城東門から井相田C遺跡～高

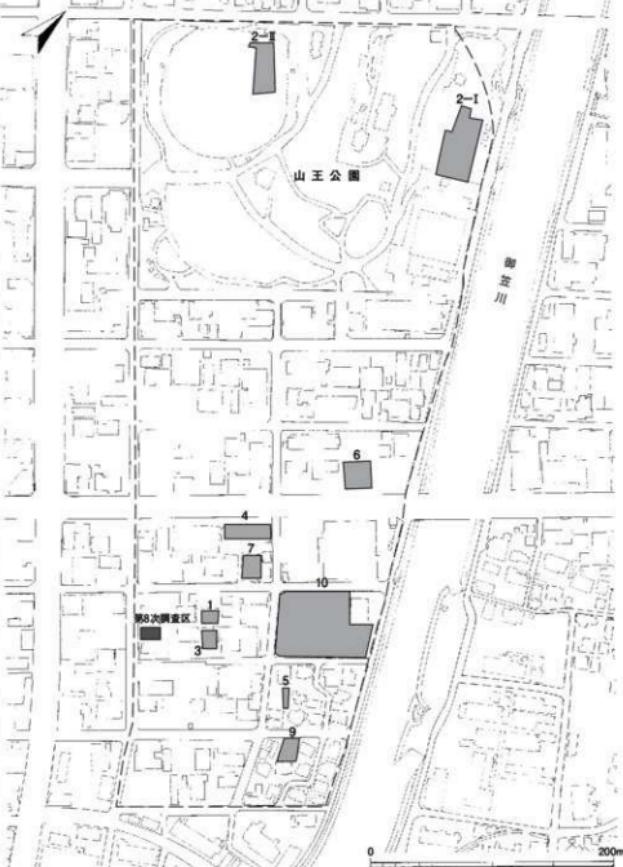


Fig.2 山王遺跡位置図(1/4,000)

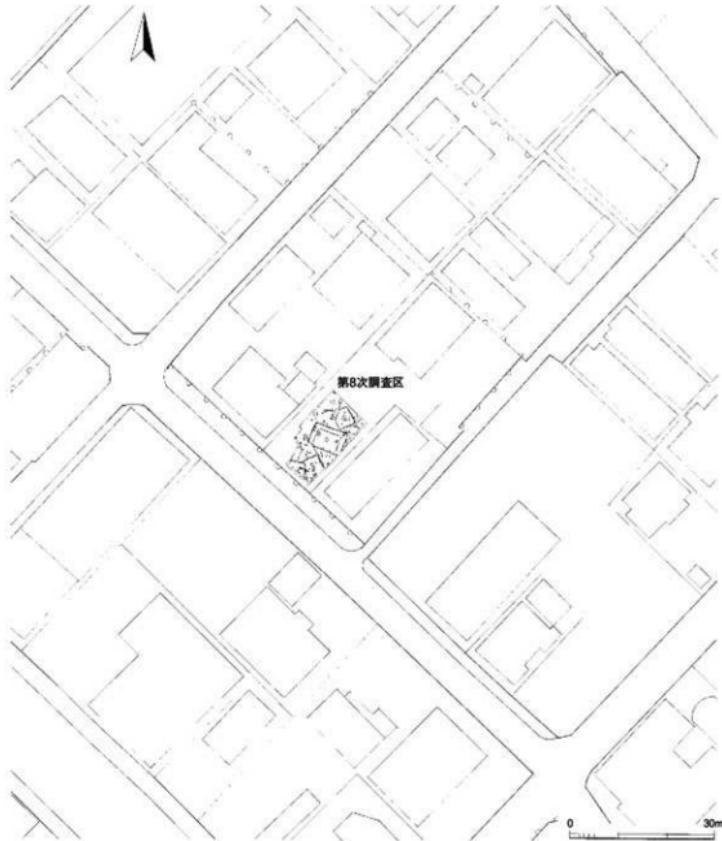


Fig.3 山王遺跡第8次調査区位置図(1/1,000)

Tab.1 山王遺跡発掘調査一覧表

調査 番号	所在地	調査期間	測量面積 (m <sup>2</sup> )	時代	概要	出土遺物	目録 番号	備考
1 9815	博多区山王2丁目	19980521～ 19980622	247	中世	井戸、溝	青磁、渡舟	625	旧北堀美 術道跡
2 0459	博多区山王1丁目9番	20041101～ 20050330	2835	古墳～古代、 中世	古墳後期～古代：土塼 中世：井戸、土塼	磨製石斧、土師器、須恵器、 丸・楕	878	
3 0468	博多区山王2丁目13番 3	20041201～ 20050112	274	弥生～古墳、 古代～中世	古墳：土塼 古代～中世：井戸、土塼	弥生土器、櫛柄鋤、縁切陶器、 越州窯系青磁、縁切陶器	879	
4 0571	博多区山王2丁目28番	20060215～ 20060331	449	弥生～古墳	弥生：堅穴住居、堅穴 住居、溝 古墳：堅穴 住居	弥生土器、土師器、須恵器、 玉類	901	
5 0823	博多区山王2丁目25番 9	20080709～ 20080805	162	弥生、古墳後 期、中世	弥生：堅穴住居、土塼、溝 古墳後期：土塼、 溝 中世：井戸、土塼、溝	弥生土器、土師器、須恵器、 陶磁器、石器、石製品	1076	
6 0857	博多区山王1丁目	20090216～ 20090423	580	弥生、古墳後 期、中世	弥生：櫛柄鋤、土塼墓、木棺墓 古墳：溝 中世：圓柱建物、井戸、土塼、溝	土器、陶磁器、石器、金 屬器	1116	
7 1118	博多区山王2丁目29番	20110728～ 20110919	330	弥生～古墳、 中世	弥生：堅穴住居、井戸 古墳：堅穴住居 中 世：大溝	弥生土器、土師器、須恵器、 木器など	1187	
8 1424	博多区山王2丁目43番 2	20141006～ 20141126	165	弥生～古代	弥生：堅穴住居、土塼 古墳：堅穴住居、土 塼 古代：井戸	弥生式土器、須恵器、土 師器、石製品、ガラス玉	1283	
9 1517	博多区山王2丁目116	20150717～ 20150911	120	弥生～中世	弥生：堅穴住居、井戸、堅藏穴、櫛柄墓 古 墳：堅穴住居 中世：井戸、掘立柱建物、区画溝	弥生土器		
10 1520	博多区山王2丁目4	20150824～ 20160226	1,000	弥生～中世	弥生：堅穴住居、堅藏穴、井戸、土塼 古墳： 堅穴住居 中世：井戸、掘立柱建物、区画溝	イングガラス管玉、ガラ ス小玉、滑石臼		

畠遺跡～板付遺跡を経て比恵遺跡群を通るいわゆる水城東門ルートと呼称される官道がN-43°-Wの方位ではほぼ直線的にのびて博多遺跡群に到達すると考えられている。本調査区に西隣する比恵遺跡群138次調査区でもこの官道遺構が検出されている。

一方、山王遺跡は、御笠川と比恵遺跡群に挟まれた低位段丘上に立地し、かつては山王公園の東斜面を山王甕棺遺跡、山王二丁目周辺を比恵甕棺遺跡と呼称されていたが、山王公園から比恵遺跡群に沿うように低丘陵が南に延びていることが明らかになり、そのために両遺跡をひとつの遺跡としてまとめたものである。この山王遺跡では、これまで10地点で発掘調査が実施されており、弥生時代前期の貯蔵穴や甕棺墓・木棺墓と中期から後期と古墳時代の竪穴住居・土壙のはかに古代と中世の井戸や掘立柱建物・区画溝などが広がっている。今次調査が8地点目の発掘調査になる。この山王遺跡は、東西が160～300m、南北が650mの逆台形形状をなし、総面積は15ha余に及び、その北端には山王公園がある。8次調査区は、この山王遺跡の南西縁に位置し、一筋の道路(水城東門ルートの切通し)を隔てて比恵遺跡群が南北に長く延び、西には比恵遺跡群79・138次調査区が対峙している。

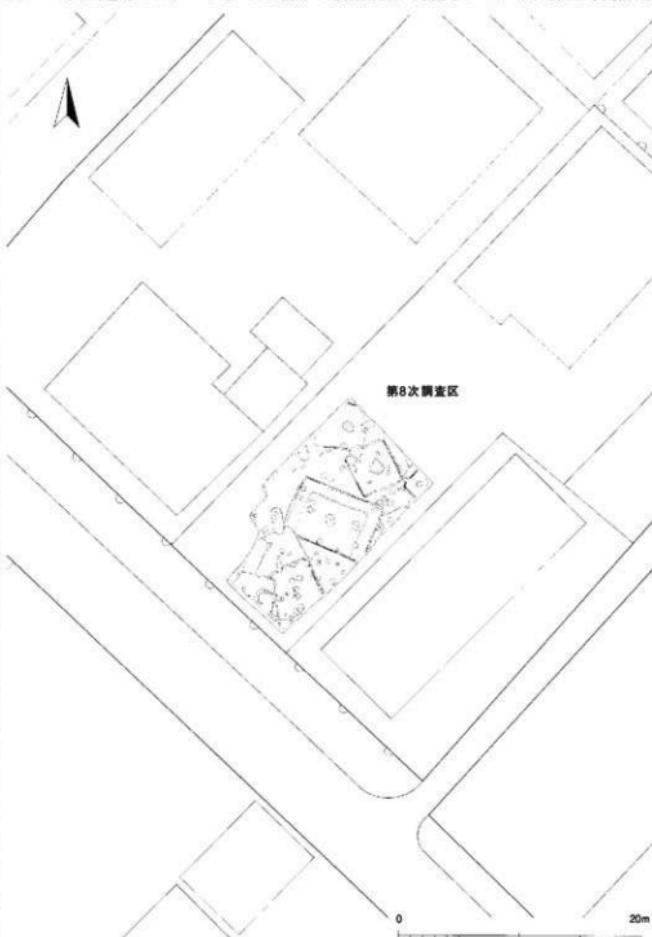


Fig.4 山王遺跡第8次調査区周辺現況図(1/400)

## II. 調査の記録

### 1. 調査の概要

山王遺跡は、かつて山王甕棺遺跡・比恵甕棺遺跡として周知されていた遺跡である。立地的には、御笠川の左岸と那珂から比恵へと南北に長く延びる低位段丘に挟まれた中にある南北長が650m、東西幅が160~300mの逆台形状をした細長い低位段丘で、面積的には150,000m<sup>2</sup>の広さである。8次調査区は、この山王遺跡の

南西端に位置し、東側の浅い開析谷を隔てて比恵遺跡群の79・138次調査区が隣接している。この比恵から山王地区は、1933年頃から始まった区画整理事業によって鳥栖ローム層上面まで大きく開削されており、標高は6.7~6.8mである。確認調査では、表土下10~25cmで鳥栖ローム層に掘り込まれた竪穴住居などが検出された。この結果に基づいて造構の現状保存について協議したが、基礎構造が設計的に難しいことから道路に面した進入スロープを除く申請地全域を発掘調査の対象として記録保存を図ることとなった。

申請地の旧状は庭園で、場内には伐採された幾本もの樹木株が残されていた。加えて、堆土は場内での処理が求められたために、調査区を3区分して実施することとなった。

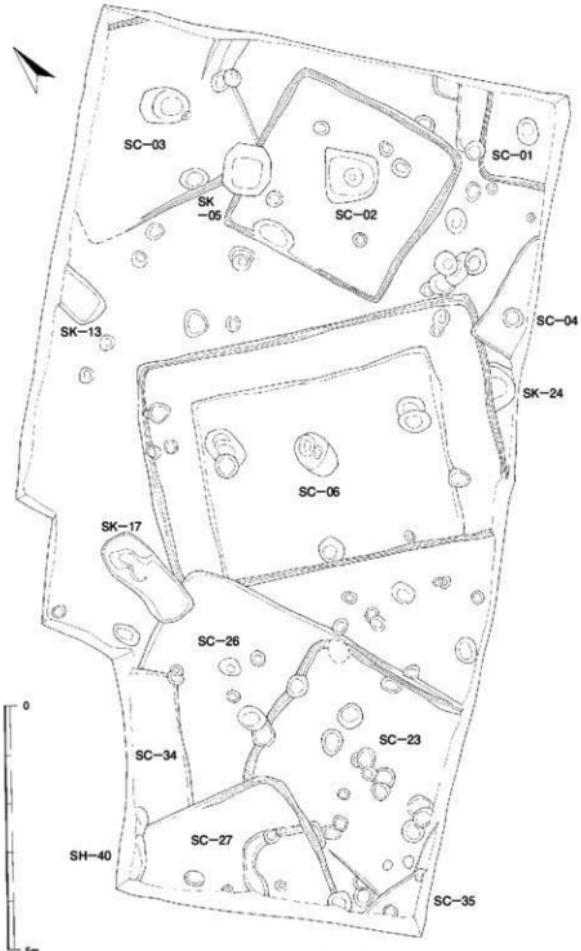


Fig.5 遺構配置図(1/100)

発掘調査は、2014(平成26)年10月6日に東側の表土層除去作業から始めたところ竪穴住居4棟と土壤を検出した。次に、排土を東側へ移して中央部の表土層を除去すると大型の竪穴住居を検出した。最後に西側の調査を実施し、11月26日の埋め戻しをもって終了した。この間、樹木の伐根作業に多くの時間と労力を要して難済した。加えて11月10日には、少し膨らんでいた歩道の擁壁が重機の振動か樹根の影響で突然に倒壊する事故が生じたが、歩行者がなく幸いであった。

発掘調査の結果、比恵遺跡群と境をなす道路に面した西側は著しく削平されていたが、弥生時代後期の竪穴住居5棟、土壙1基と古墳時代後期の竪穴住居5棟、土壙3基および中世以降の垣2基を検出した。分布的には、全城に広がっており、周辺域には該期の集落域が広く展開している可能性が想定される。遺構の実測は、調査区の長辺に沿って10mを基準とした任意の方眼を設定し、更にその中に2mの小方眼を組み込み、長辺に沿った東から西へa~j、北から南へ1~6とした。東西の主軸ラインは、磁北から $144^{\circ} 44'$ 西偏している。また、土壙や遺物の出土状況など重要なものは、1/10で個別に実測した。

## 2. 弥生時代の調査

弥生時代の遺構は、竪穴住居5棟と土壙1基、柱穴等を検出した。これらの遺構は、調査区全域に亘って東西に広く分布している。ただし、調査区の南北幅が短く、東西に長い狭小さを勘案すると、この傾向が周辺域の在り方を具現しているとは云い難い。また、プラン的には方形のものと長方形のものがあり、床面までの比高差も浅いものと深いものがある。この差違が何に起因するかは明らかではないが、集落を構成する機能と何らかの関わりがあるかに思われる。

### 1) 竪穴住居(SC)

#### 1号住居 SC-01(Fig.7 PL3)

1号住居は、調査区の東隅部に位置し、北壁から西壁の一部を検出したのみで、その大半は調査区外に広がっている。平面的には、北壁が180cm、西壁は140cmを検出したが、一辺が400cmほどの方形プランをなそう。床面までの深さは20cmで、壁面は急峻に立ち上がる。壁下には、幅が5~7cm、深さが3~10cmの周溝が巡っている。床面は、掘方上に10~15cmの黄褐色粘土ブロックを敷き固めて貼床としている。壁面から80~100cmの位置に長辺が54cm、短辺が44cm、深さが22cmのピットがあり、主柱穴が4本柱の住居と考えられる。覆土は、黒褐色土の單一層で、遺物は土師器片がわずかに出土した。

#### 3号住居 SC-03(Fig.7・8 PL3・4・13)

3号住居は、調査区の北隅に位置する住居で、南隅壁は2号住居を切り、5号土壙によって削平されている。西壁は消失しているが、南北長は390cmで、東西長が400~410cmに復原される方形プランをなすものであろう。垂直に立ち上がる壁面の深さは15~22cmで、

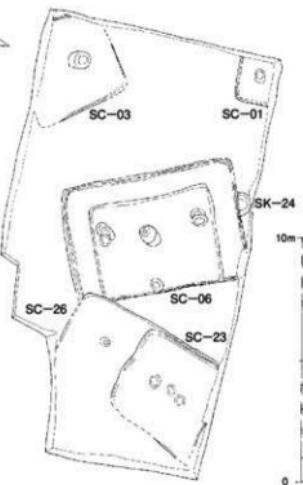


Fig.6 弥生時代の遺構配置図(1/200)

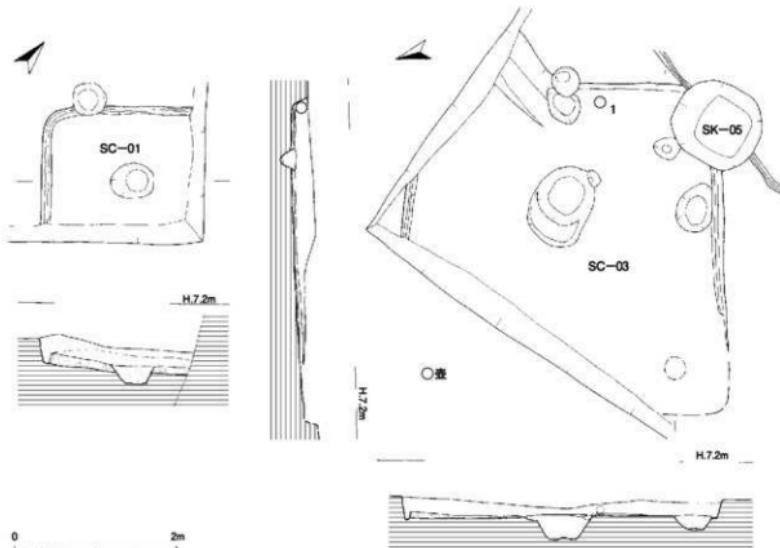


Fig.7 1・3号住居実測図(1/60)

北壁と南壁下には幅が6~10cm、深さが4~8cmの浅い周溝があるが、東壁下には周溝は確認できなかった。床面は、掘方上に黄褐色粘土を薄く敷き詰めて貼床としている。この床面の中央部よりやや東寄りに長辺が100cm、短辺が73cm、深さが28~30cmの2段掘構造をした小土壙があり、その西壁には焼土壁が観察され、覆土中にも焼土塊と炭片の混入が観られることから炉跡の可能性を考えられる。主柱穴は4本柱が想定されるが、しっかりしたものは検出できなかった。覆土は、黒~暗黒褐色土で、弥生高坏片のほかに土師器や須恵器の高坏、甕片がわずかに出土した。

1は、扁球形の胴部をなす丸底壺である。底部はナデ、胴部は丁寧なナデ調整。2は、手捏ねの棒状の土製品で、直径が2.2cm、長さが4.94cm+aである。良質の胎土には微細~細砂粒と雲母微細をわずかに含み、焼成は良好。色調はくすんだ淡赤橙色。

#### 6号住居 SC-06(Fig.9・10・11・12 PL4・5・6・13・14)

6号住居は、調査区の中央部にある大型の住居で、北東隅壁は4号住居に、北西隅壁は26号住居によって削平されている。平面形は、長辺が735cm、短辺が495cmの長方形プランを呈し、床面から21~24cmの高さには、幅が100~110cmのベッド状遺構が、西壁を除く三方に巡っている。このベッド状遺構から検出面までの深さは、20~29cmでベッド状遺構のない西壁の深さは49~54cmである。ベッド状遺構の

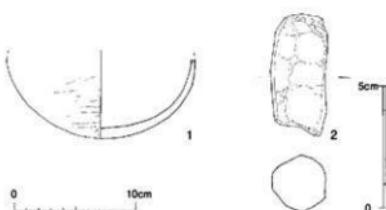


Fig.8 3号住居出土遺物実測図(1/2・1/4)

ない西壁の中央部には、50cm径のピットが39cmの深さまで掘り込まれており、覆土中には5~13cmの大磚石が根絞石状に混入しており、出入り口の梯子材を固定したものと考えられる。また、四壁下には、幅が7~15cm、深さが7~9cmの周溝が巡り、その周溝内には直径が5~10cm、深さが5~15cmの小ピットが30~50cm、最長でも100cmの間隔で打ち込まれており、壁面の崩落を防ぐ護材の固定に供されたものと考えられる。床面とベッド状遺構は、黄褐色粘土を厚く幾層にも重ねて突き固めた貼床で、その中央部には、長辺が100cm、短辺が65cm、深さが35cmの2段掘りの構造をなす炉が掘り込まれている。この炉の30cmほど東壁側に寄って柱間が400cmの2本柱の主柱穴が掘り込まれている。この主柱穴の30cmほど内側の炉の延長線上にも柱間を同じくする2本の主柱穴があり、

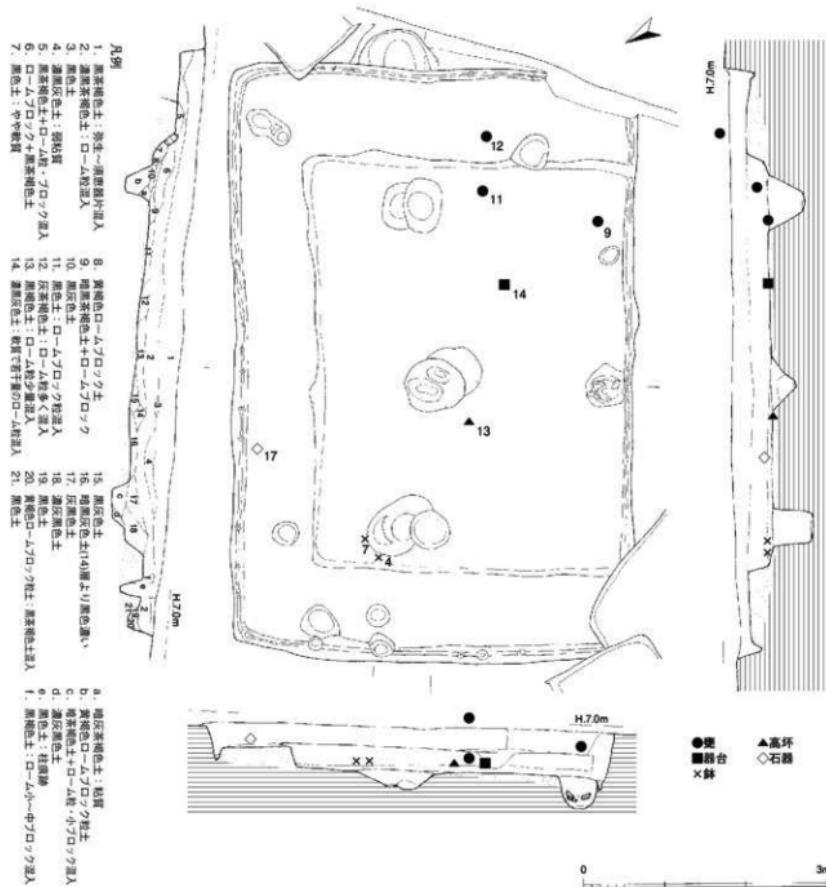


Fig.9 6号住居実測図(1/60)

建て替えが行われたことが窺われる。ベッド状造構を含めた床面積は36.4m<sup>2</sup>で、現代の畳数に換算すると12畳の部屋に相当し、このうちベッド状造構の床面積は15.5m<sup>2</sup>でその占有率は42.5%に相当する。覆土は、黒～暗黒茶褐色土の單一層で、南側のベッド状造構上や床面上からは弥生後期の小・中型甕・鉢・器台片が出土したほかに上層からは土師器や須恵器が出土した。

3は、ストレートに外反する口縁部に粘土紐を貼り付けて外縁を垂直に整えた壺で、その外縁には櫛描きの波状文を施している。胎土は精緻で少量の微細～小砂粒を含み、色調は濃赤褐色、吉備系か。4～8は、鉢である。4は、半球形の胴部が垂直に立ち上がった後に「く」字状に短く外反する。調整は口縁部がヨコナデ、胴部は内が指頭押圧ナデ、外面はナデ。内外面ともに炭化物状の黒色物が付着している。胎土はやや粗く、多量の微細～中砂粒と少量の粗砂粒を含む。口径は12cm、器高は5.9cm。5・6は、体部が半月形をした浅鉢である。扁平な体部は、緩やかな皿状の弧をなし、口縁部は5が弧状のまま緩やかに外反するが、6の口縁部は、垂直に立ち上がって端部は摘み上げている。5は、口径が14.8cm、器高が4.6cmで口縁部はヨコナデ、胴部外面はナデ、内面は押圧ナデ後に細かいハケ目調整。胎土には細～小砂粒のほかに雲母微細と赤鉄鉱塊をわずかに含み、淡黄橙色。6は、口径が14.4cm、器高は4.8cm。色調は淡明赤橙色。7は、口径が19.6cm、器高は9.4cmで口縁部は半球形の体部からストレートに外反する。調整は、口縁部がヨコナデ、体部外面は押圧ナデ、底部はケズリ状の搔き上げで内面は指頭押圧ナデ。胎土は粗く、微細砂～中砂粒を多く含むほかに少量の石英粗砂粒を含む。色調はくすんだ赤橙褐色。8は、口径が10.4cm、器高が4.5cm。口縁部は、体部からストレートに小さく外反し4cm径の小さな平底状の底部が付く。口縁部がヨコナデ、胴部は内面が押圧ナデ後に細かいヨコハケ目、外面は指頭押圧ナデ。内底は押圧ナデ、外底はナデ調整。胎土は良質で、微細～石英粗砂粒を多く含むほかに僅少の雲母微細と赤鉄鉱塊を含む。淡赤橙色。9～11は甕である。9は、底径が8.8cmの甕の底部である。平底の底部はやや上げ底である。底部はナデ、外面はハケ目、内底面は押圧ナデ、外底面は2次被熱で赤変している。胎土は粗く、微細～小砂粒と雲母微細を含む。色調はくすんだ黄褐色。10は、長胴形の丸底甕であるが、底部は5.2cm径の平底ぎみをなす。胴部は、外面が丁寧なナデ上げ、内面は押圧ナデ後にナデ仕上げ、内底面は指頭押圧ナデ、外底面はナデ調整。胎土は粗く微細～石英粗砂粒を含む。11は、口径が22.3cm、器高は32.1cm。口縁部は、大きく外反する。尖底をなす倒卵形の胴部には3.3cm径の小さな底部が付く。口縁部はヨコナデ、胴部は外面が目幅の粗いハケ目、内面は押圧後にナデ仕上げ、指頭押圧調整の内底部には炭化物が付着している。胎土は粗く、多量の細～中砂粒と少量の石英粗砂粒を含み、色調は淡黄橙色。12は、口径が41～42.8cm、器高が44.2cmの中型甕である。口縁部は大きく「く」字状に外反する。口縁部下には三角凸帯、倒卵形の胴部下位にコ字凸帯1条を貼り付け各々にヘラ先状工具による刺突文を施している。底部は平底の形状を残す肉厚の丸底である。調整は、胴部が押圧、口縁部がヨコナデでその上に粗いハケ目調整を施している。胎土には多くの細～中砂粒と少量の赤鉄鉱塊を含み、色調は淡明黄橙色。13は、口径が33.4cmの高坏である。坏体部は緩やかに内弯し、口縁部は凸帯状に屈曲して段を造り、そこから伸びやかに外反する。口縁部内面には2～3mm幅の暗文を施している。調整は、内面が丁寧な研磨、口縁部外面はナデ後にハケ目。胎土は精良で、微細～細砂粒のほかに雲

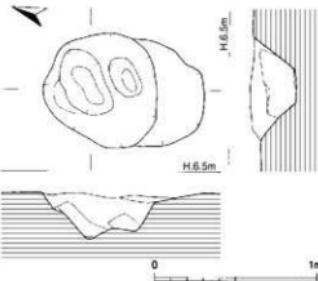


Fig.10 6号住居炉実測図(1/30)

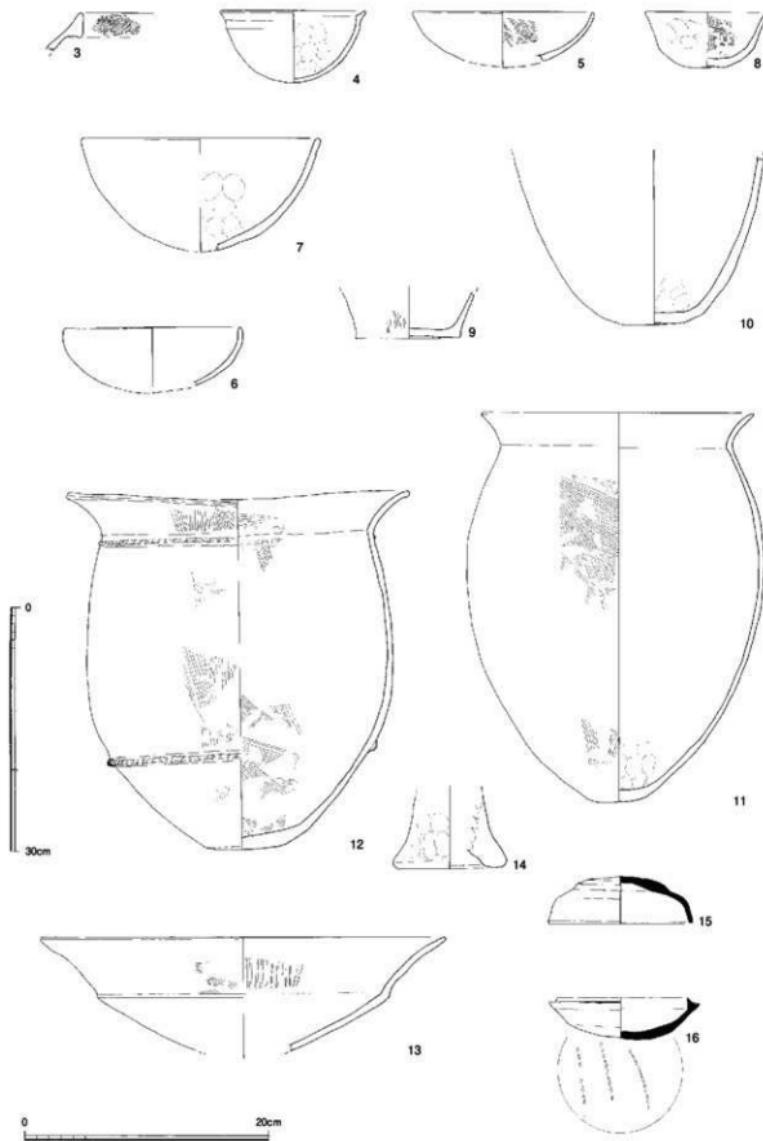


Fig.11 6号住居出土遺物実測図 1(1/4・1/6)

母粒と赤鉄鉱塊を含む。色調は明赤橙色で、丹塗り高坏の可能性がある。14は、底径が9.4cmの器台である。調整は粗い指頭押圧ナデ。胎土には微細～小砂粒と雲母・赤鉄鉱塊を含む。色調は淡明黄白色で一部には被熱による赤変がある。15は、口径が12cm、器高が3.8cmの須恵器坏蓋である。天井部と体部の境には緩やかな段を作り、口縁部は内湾ぎみに立ち上がる。調整は、口縁部がヨコナデ、天井部内面はナデ、外面はヘラケズリ。胎土は精良で、少量の微細～細砂粒を含み、焼成は堅緻。外面は淡灰白色～淡灰黒色、内面は淡明灰紫色。16は、口径が10.7cm、器高が3.5cmの須恵器坏身で蓋受けの返りは短く内傾する。口縁部～体部上半はヨコナデ、内底面はナデ、外底面はヘラケズリで、「川」字状の3筋のヘラ記号を線刻している。胎土は精良で、微細～中砂粒を含み、焼成は堅緻。灰紫色。

17は火成岩質の敲打石で、長さが21.5cm、幅が6.1cm、厚さが4.4～5.4cm。下縁には敲打による剥離痕がある。18・19は砥石である。18は長さが11.4cm、幅が7.5～8.6cm、厚さが3.8～4.9cmの小型品である。火成岩質。19は細粒砂岩質の砥石片である。砥面は上縁にのみ残っている。20は、三日月形の磨製石製品で玉の未製品の可能性もありうる。長さが4.18cm、最大幅が1.4cm、厚さは0.74～1.02cmで内弧は丁寧に研磨されているが、外縁はやや粗い。安山岩。21は、凹基形をなす黒曜石製打製石器で基部の両端を欠く。

### 23号住居 SC-23(Fig.13・14 PL.7・8・10・14)

23号住居は、調査区の南西隅に位置し、西壁は27・35号住居に削平されている。また、東壁は、26号住居の壁面と一体的に重なっているが、26号住居に先行している。平面的には、南北長が415cm、東西長が390cmの方形プランを呈する。壁面は、ほぼ垂直に立ち上がるが、東壁が8cm、南壁が11cmと浅く、削平が著しい。北壁と東壁下には、幅が8～15cm、深さが3～5cmの周溝が巡っている。床面は、掘方上に黄褐色粘土を浅く敷き固めた貼床で、東西壁から120～130cmの位置に長辺

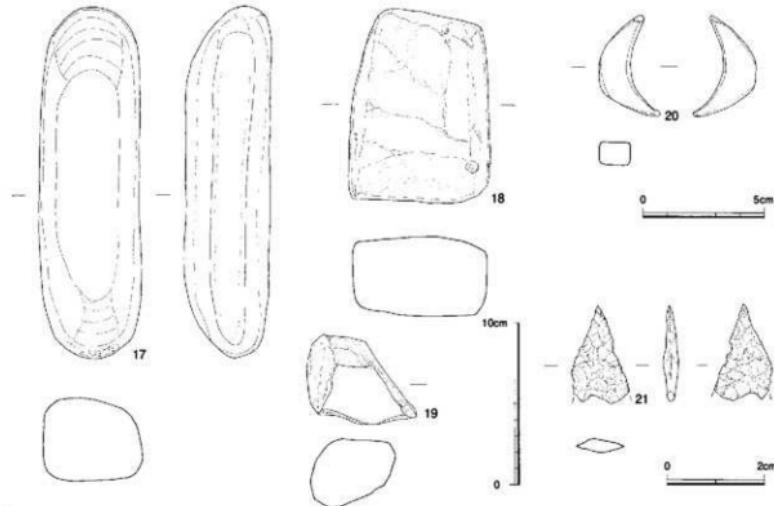


Fig.12 6号住居出土遺物実測図2 (1/1・1/2・1/3)

が55cm、短辺が45cm、深さが53~59cmの楕円形プランの2本の柱穴が対称位にある。この柱穴には、15~20cm径の柱痕跡があり、その柱穴間の中央には壁体が赤変した炉がある。覆土は、黒~暗黒茶褐色土の單一層で、遺物は、弥生土器のほかに土師器や須恵器小片がわずかに出土した。

23は、鉢形のミニチュア土器で、口径が3.3cm、底径が1.3cm、器高が1.7cmである。調整は指頭押圧ナデ。良質な胎土には微細~細紗粒を比較的多く含み、色調は淡明赤橙色。

#### 26号住居 SC-26(Fig.13 PL.7・11)

26号住居は、調査区の西部に位置する大型の住居で、北東隅壁は6号住居を切り、17号土壙に削平されている。また、北壁と西壁は34号住居と27号住居によって削平されている。一方で、東壁の南半部は23号住居と一緒に重複しているがこれよりも新しい。これを時系列的に並べると6・23号住居

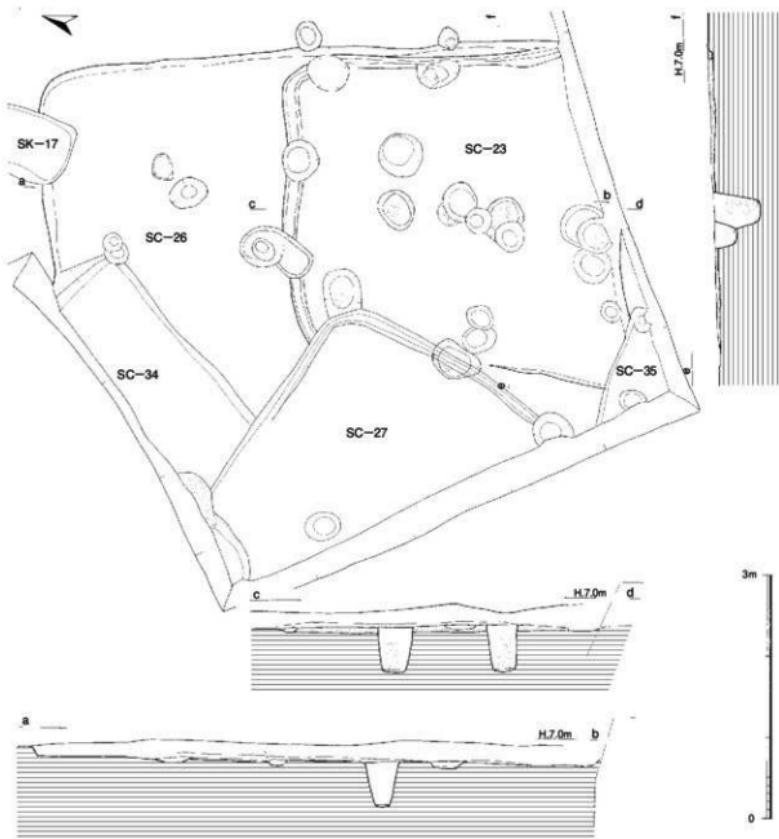


Fig.13 23・26号住居実測図(1/60)

→26号住居→17号土壙・34号住居→27号住居の順になるが、6・23号住居の先後は明らかではない。平面形は、長辺が $690\text{cm}+a$ 、短辺が $470\text{cm}+a$ の長方形プランをなす。壁面は、比較的急峻に立ち上がるが、削平により壁高は11~12cmと6号住居と比べて浅くベッド状造構は確認できなかつた。床面は、浅い掘方上に黄褐色粘土と小ブロックを薄く敷き固めて貼床としている。主柱穴は、東壁から180~200cmの位置に300cmの間を置いて2本が並ぶ2本柱と考えられる。覆土は、暗黒茶褐色土の單一層である。

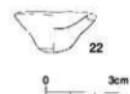


Fig.14 23号住居出土  
遺物実測図(1/2)

## 2) 土 壙(SK)

### 24号土壙 SK-24(Fig.15 PL.8)

24号土壙は、調査区の南壁に沿った中央部に位置し、すぐ東には4号住居がある。北半部は、6号住居の削平を受けているが、平面形は、長辺が122cm、短辺が98cmの楕円形プランを呈する。主軸方位は、N-82°-W。壁面は、東小口壁が垂直なほかは緩やかに傾斜して立ち上がる。壁高は72cmで、壙底から10~15cmの所に弱い屈曲面を作つて緩やかに窄まる。西小口壁に沿つた壙底の南壁側には、長辺が36cm、短辺が28cm、深さが6~12cmの卵形をした小ピットがある。断面形は、舟底状をなす。覆土は、黒色土の單一層であるが、6号住居のベッド状造構になる西側の上面は貼床の黄褐色粘土ブロックが厚く堆積している。遺物は、弥生土器のほかに土師器小片が混入して出土した。

## 3. 古墳時代の調査

古墳時代の遺構は、方形の竪穴住居5棟と土壙3基のほかに柱穴を検出した。柱穴の中には直径が15~20cmの腐食した柱痕跡が残るものもあるが、一つの掘立柱建物としてまとまらなかつた。また、住居は全体に削平が顕著で、床面までの比高差は浅く、弥生時代の住居と対照的な傾向を示す。

### 1) 竪穴住居(SC)

#### 2号住居 SC-02(Fig.17・18 PL.9・14)

2号住居は、調査区東壁際に位置する住居で、すぐ西には6号住居、南には4号住居がある。北壁は3号住居と5号土壙に切られており、その開削は、2号住居→3号住居→5号土壙の順になる。平面形は、東西長が372cm、南北長が390cmの方形プランをなし、その床面積は14.5m<sup>2</sup>である。全体に削平が著しく、床面までの深さは、16~27cmと浅いが、壁面は急峻に立ち上がる。北東隅壁および南西隅壁と西壁の一部を除く壁下には幅が8~10cm、深さが2~5cmの周溝が巡つてゐる。床面は、掘方上に3~5cmの厚さの黄褐色粘土を敷き固めて貼床としている。主

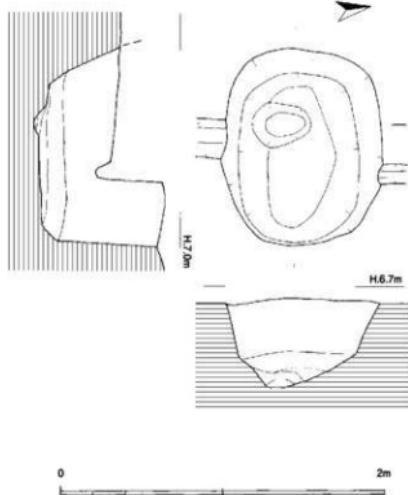


Fig.15 24号土壙実測図(1/30)

柱穴は、P1～P4の4本柱で、そのスパンは170～200cmとやや歪みがある。この4本の主柱穴の中には、一辺が80～110cm、深さが12～18cmの台形プランの土壙があり、その壙央には35～40cm径のピットがある。また、西壁の北寄りには、長辺が86cm、短辺が55cm、深さが21cmの小土壙がある。覆土は、暗茶～暗黒茶褐色土で、床面上には弥生土器の壺や甕片のほかに土師器片が散漫的に貼り付いて出土した。

23・24は、小型丸底壺である。23は、口径は12cm。胴部は肩の張らない球形をなし、口縁部は緩やかに外反する。調整は口縁部がヨコナデ、胴部内面は指頭押圧後にナデ。良質な胎土には微細～中砂粒を比較的多く含む。淡黄褐色の胴部外面は、2次被熱による赤変と黒色物の付着がある。24は、胴部が玉葱状の偏球形をなす。胴部中位がヨコナデ、底部はナデ調整。胎土は精良で微細砂と赤鉄鉱塊をわずかに含む。淡明黃灰色。25は、口径が12.4cmの小型の鉢である。口縁部は短く外反し、胴部は肩の張らない球形をなす。口縁部はヨコナデ、胴部外面はナデ、内面は押圧ナデ。胎土は精良で少量の微細～小砂粒と若干量の雲母微細を含む。内面は淡黒色、外面はくすんだ淡橙色。26・27は、小型の甕である。26は、口径が11.2cmで口縁部は緩やかに外反する。胎土はやや粗く、多くの小～中砂粒と若干量の赤鉄鉱塊を含む。明黄橙色。27は、口径が11.2cm。垂直に立ち上がる口縁部は端部が小さく内傾し、胴部はやや肩が張る。調整は口縁部がヨコナデ、胴部は外面がナデ後に粗いハケ目、内面は押圧ナデで幅が1.5～2cmの粘土糸痕が明瞭に残る。胎土は粗く、小～中砂粒と雲母微細を含む。外面は黄橙色、内面はくすんだ淡橙色。28は口径が11.2cm、器高が4.5cmの須恵器壺である。口縁部は小さく内傾し、端部は摘み上げるように直口とする。胎土は精良で微細～小砂粒と雲母粒をわずかに含み、色調は灰色。外底面には3筋の直線的なヘラ記号があるが、そのうち1筋はきわめて短い。

#### 4号住居 SC-04(Fig.19・20 PL.3・9・10・14)

4号住居は、南東隅に位置し、その北西隅壁は、6号住居の東壁を切っている。住居の大半が調査区外に広がっているため全容は明らかではないが、一辺が350～400cmほどの方形プランが想定される。その場合、住居の北東隅壁は1号住居の西壁を切ることになる。垂直に立ち上がる壁面は削平が著しく、壁高は3～8cmときわめて浅く、床面は黄褐色粘土を薄く敷き詰めて貼床としている。西壁から110cm、北壁から40cmの位置に38～45cm径のピットがあり、やや北壁に寄っているが、4本柱を主柱穴とするものと考えられる。覆土は、茶褐色土の單一層で、柱穴側の床面上から須恵器壺と滑石製紡錘車が出土した。

29は、口径が10.6cm、器高が4.9cmの須恵器壺である。口縁部は、蓋受けからストレートに内傾して立ち上がり、平坦な端部は内にむかって整えている。調整は、体部中位から口縁部がヨコナデ、内底面はナデ、外底面は右廻りのヘラケズリ。良質な胎土には多くの微細～小砂粒のほかに僅少の粗砂粒を含む。焼成は堅緻で、色調は灰色。30は、上面径が3.4cm、下面径が5cm、厚さが1.5cmの滑石製紡錘車で、中央に孔径が6mmの円孔を穿っている。断面形は台形で、良く研磨されている。

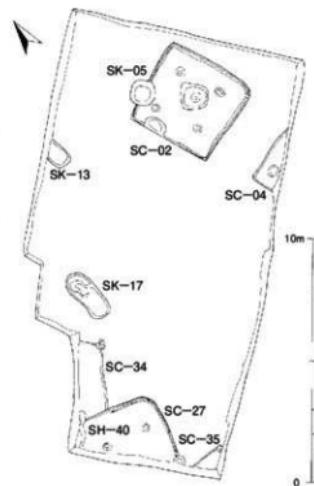


Fig.16 古墳時代の遺構配置図(1/200)

### 27号住居 SC-27(Fig.19・21)

PL.10・11)

27号住居は、調査区の南西部に位置し、北東隅壁は23号住居を切っているが、重複が想定される南端の35号住居との先後関係は明らかではない。また、北西隅壁は、40号炉によって大きく削平されている。平面形は、確定的な壁面がないために明らかではないが、一辺が400~450cmの方形プランを呈することが想定される。壁面はやや急峻に立ち上がるが、大きく削平されて壁高は8~14cmと浅い。東壁と北壁の半ばまでは、壁下に幅が8~10cm、深さが4~5cmの深い周溝が付設されている。床面は、掘方上に黄褐色粘土を浅く敷き固めて貼床としている。主柱穴は確定できなかった。

覆土は、暗茶~暗黒茶褐色土の單

一層で、遺物は弥生土器と土師器小片がわずかに出土した。

31は、直径が0.5cm、厚さが0.4cmのコバルトブルーのガラス玉である。円孔は直径が1mmで側縁には未貫通の孔がある。

### 34号住居 SC-34(Fig.19 PL.1)

34号住居は、調査区の南西端にあり、南東隅壁は27号住居と40号炉によって削平されている。西壁の大半が調査区外に広がっているためにその全容は明らかではないが、遺存する東壁と南壁の一部から一辺が450cm内外の方形プランを呈するものと考えられる。深さが20cmの壁面は急峻に立ち上がり、壁下の周溝は検出できなかった。床面は、黄褐色粘土粒と粘土ブロックをやや厚く敷き固めた貼床である。覆土は、茶~暗茶褐色土の單一層で、遺物は土師器片が出土した。

### 35号住居 SC-35(Fig.5 PL.1)

35号住居は、調査区の南端にあり、北壁は23号住居の南西隅壁を切っているが、27

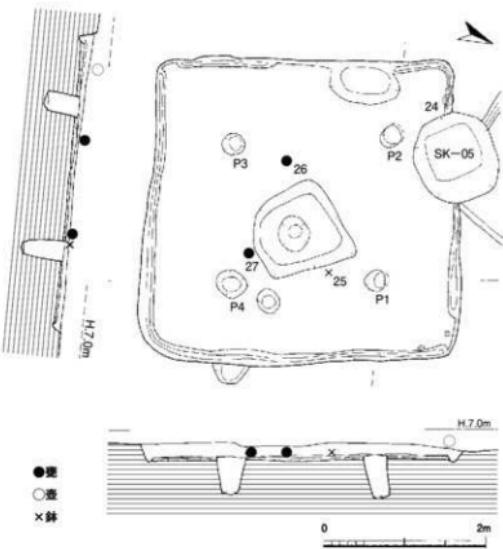


Fig.17 2号住居実測図(1/60)

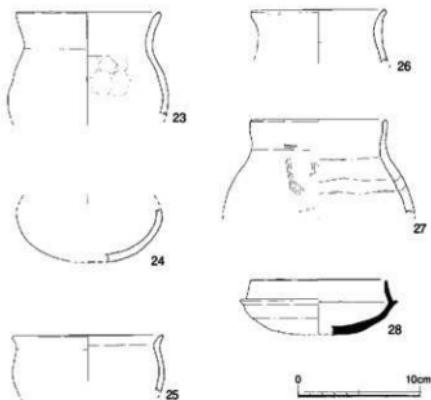


Fig.18 2号住居出土遺物実測図(1/4)

号住居との先後は明らかではない。平面的には、北東隔壁の一部を検出したのみで、その全容は判然としない。北壁の長さは、北東隔壁から150cmで、平面形は一辺が350~400cmほどの方形プランをなそう。壁面は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は北東隔壁が15cm、削平の著しい北壁西側が4cmと浅い。床面は、黄褐色粘土を薄く敷き固めた貼床で、主柱穴は確認できなかった。覆土は、暗茶褐色土の單一層で、遺物は土師器小片がわずかに出土した。

## 2) 土 壤(SK)

### 5号土壤 SK-05(Fig.22・23 PL.12・14)

5号土壤は、調査区の北端に位置する。北側は3号住居を、南側は2号住居を切っており、その新旧は5号土壤←2号住居←3号住居の順になる。平面形は、長辺が108cm、短辺が99cmの隅丸的な方形プランを呈し、N-62°30' -Eに主軸方位をとる。壁面は、緩やかに立ち上がり、壁高は65cmを測る。壤底は、浅く凹レンズ状に窪み、舟底状の断面形をなす。覆土は、黄茶褐色土の單一層で、遺物は、須恵器片がわずかに出土した。

32は、口径が14.2cmの土師器の台付鉢である。口縁部は、半球形の体部から垂直に立ち上がる。調整は、口縁部がヨコナデ、内面が指頭押圧後にナデ、外表面はナデ。胎土には細い石英粗砂を多く含む。外表面はくすんだ赤橙色、内面は暗黄橙色。

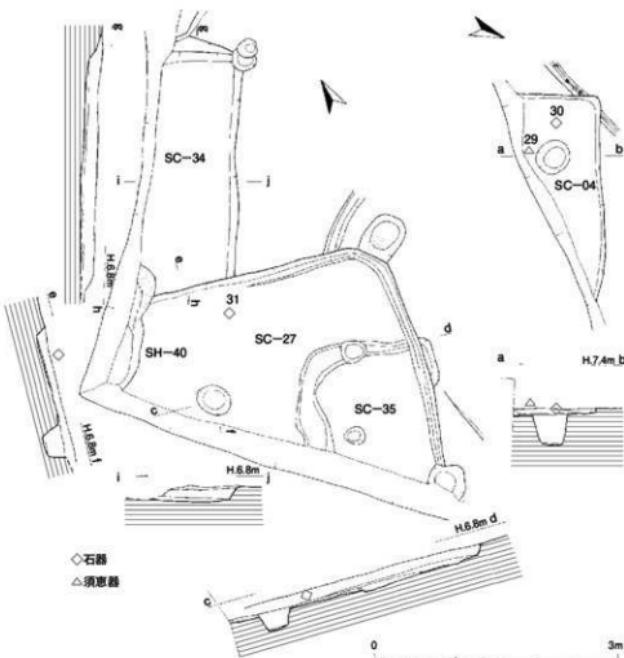


Fig.19 4・27・34号住居実測図(1/60)

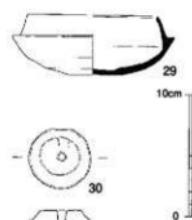


Fig.20 4号住居出土  
遺物実測図(1/4)

### 13号土壤 SK-13(Fig.22 PL.12)

13号土壤は、調査区の北壁際に位置する南北軸の土壤で、すぐ東には3号住居の北西隔壁が接している。北小口壁が調査区外に広がっているが、平面形は、短辺が79cmの長方形プランを呈し、長辺は160~170cmほどに復原できよう。主軸方位は、N-8°30' - Wにとる。壁面は、やや緩やかに立ち上がり、壁高は33cmを測る。壙底は、ほぼフラットで断面形は逆台形をなし、土壙幕の可能性も否定できない。覆土は、黄褐色ローム粒をわずかに含む黒色土の單一層で、遺物は出土しなかった。

### 17号土壤 SK-17(Fig.22 PL.2)

17号土壤は、調査区北壁際のはば中央部にある南北軸の土壤である。南小口壁は6・26号住居を切っており、その新旧は6号住居→26号住居→17号土壤の順になり、最も新しい。平面形は、長辺が216cm、短辺が80~93cmのやや不整な長方形プランを呈し、N-3°-Eに主軸方位をとる。壁高は、10~12cmと浅い。壙底は、ほぼフラットであるが、北小口側はやや入り組んだ不整な2段掘り状の

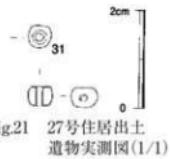


Fig.21 27号住居出土  
遺物実測図(1/1)

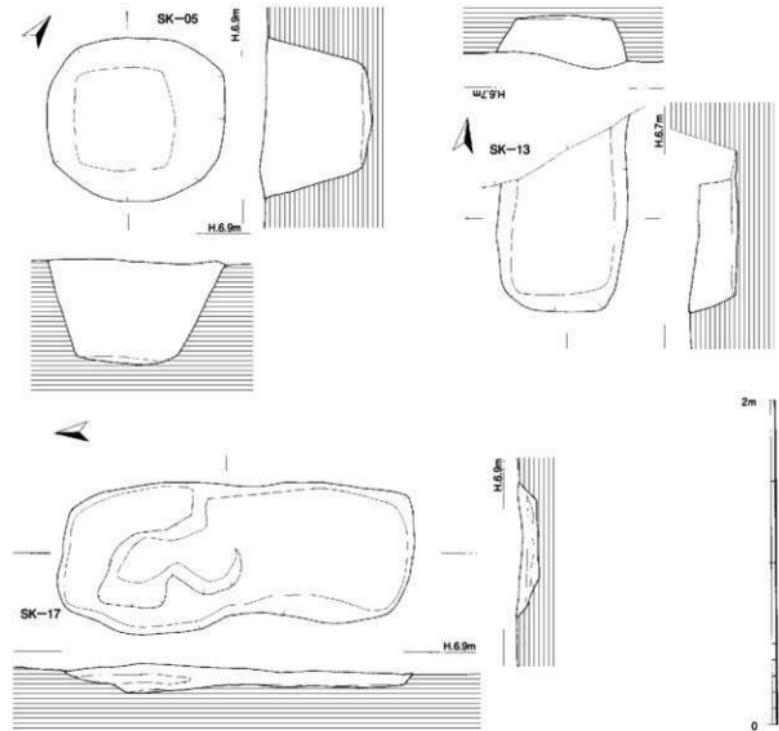


Fig.22 5・13・17号土壤実測図(1/30)

構造をなしている。覆土は、黄褐色ロームブロックと砂粒を含む暗茶褐色～黒茶褐色土で、遺物は、土師器の小片がわずかに出土した。

#### 4. そのほかの遺構と包含層出土の遺物

弥生時代と古墳時代の竪穴住居や土壙のほかに炉と柱穴を検出した。このうち炉は、出土遺物が少なく時期は定かではない。柱穴は、竪穴住居に並行すると考えられるが、掘立柱建物としてはまとまらなかった。また、表土下には暗茶褐色の遺物包含層が薄く堆積していたが、包蔵する遺物は少ない。

##### 1) 炉(SH)

###### 40号炉 SH-40(Fig.19)

40号炉は、調査区の北西隅に位置する炉で、2基の炉が切り合っており、西側の炉が新しい。いずれの炉も南東壁の一部を検出したのみで、その全容は明らかではないが、平面形は110～120cm径の円形プランが想定される。東側炉の深さは18cm、西側炉の深さは10cmで、壁面は緩やかに立ち上がり、壁体は良く焼けて厚い。覆土は、炭片や焼土粒の混入した黒～暗黒褐色土の單一層で、遺物は土師器片がわずかに出土した。

##### 2) 包含層の遺物(Fig.24 PL.14)

33は、底径が8cmの弥生土器甕の底部である。底部は外方に大きく外反し、底厚は3.6cmと厚い。内底面は指頭押圧ナデ、外面は押圧ナデ、外底面はナデ調整。胎土は粗く、細～石英中砂粒が多く含み、色調はややくすんだ灰黒色。

### III. おわりに

第8次調査では、弥生時代後期後半と古墳時代後期の竪穴住居と土壙からなる集落域の一画を検出した。竪穴住居の深度は、弥生時代が深く、古墳時代は浅い傾向が窺える。プラン的には弥生時代のものが長方形～方形プランを呈するのに対して古墳時代のものは方形プランをなす。また、構造的には弥生時代の住居が2本柱で、主柱穴間に炉を配するのに対して古墳時代の住居は4本柱で壁際に小土壙を有するものもある。このうち弥生時代の6号住居は、壁下にベッド状遺構をコ字状に巡らし、ベッド状遺構のない壁下には根占石で固めた出入り口が確認された。規模的には、一辺が7.35m×4.95mで面積は36.38m<sup>2</sup>=22畳の広さであるのに対して古墳時代の2号住居は3.9m×3.72mで面積は14.5m<sup>2</sup>=9畳の広さでその格差は大きい。しかし、弥生時代の住居がすべて長大な規模ではなく、古墳時代のそれと大差が無いのが一般的である。この特大な6号住居や26号住居の存在は、該期の中で特筆される住居と云わざるを得ず、該期の集落域に於ける機能を考えると意義深いものがある。因みに魏志倭人伝の一章国都邑である原ノ辻遺跡では、この規模の竪穴住居を使節團の客殿として考えられており、博多湾に面した比恵・那珂丘陵の大集落域における意義とその機能を考えると興味深い資料と成り得る。いずれにしても本調査区のように狭小な調査域で検出した遺構をもって短絡的に論じることはできず、今後は該期の集落域の広がりとその中における特大な住居の立地と機能を総合的に再検討して論じる必要がある。

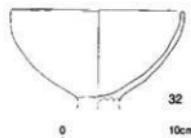


Fig.23 5号土壙出土遺物  
実測図(1/4)

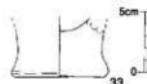


Fig.24 包含層出土遺物  
実測図(1/4)

P L A T E





1) 調査区全景(東から) CG合成



2) 調査区東側全景(東から)



1) 調査区中央部全景(東から)



2) 調査区西側全景(北から)



1) 1～4号住居(東から)



2) 1号住居(北から)



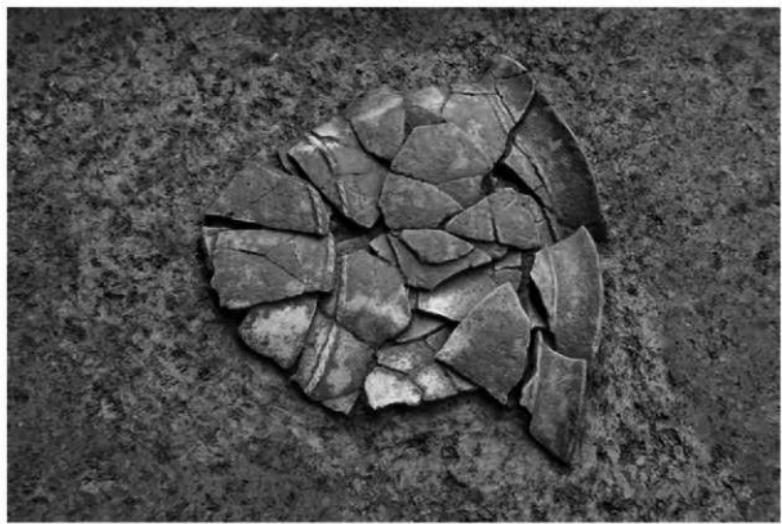
1) 3号住居(北西から)



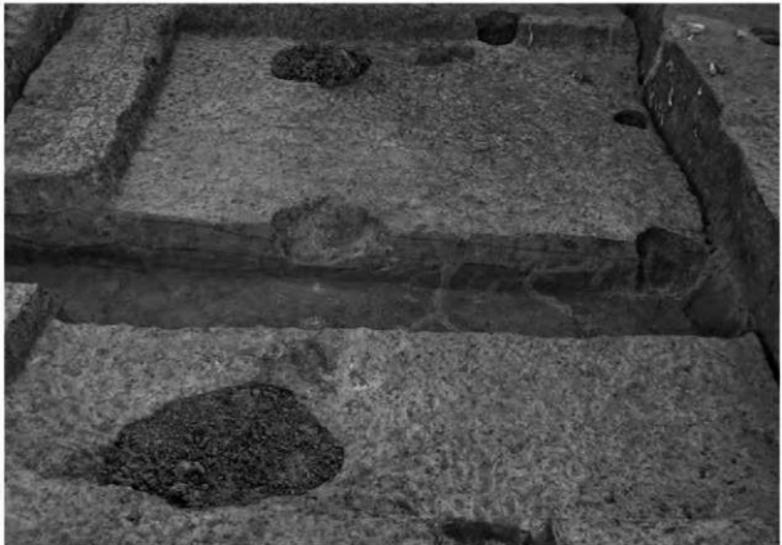
2) 6号住居(北から)



1) 6号住居遺物出土状況(北から)



2) 6号住居遺物出土状況(東から)

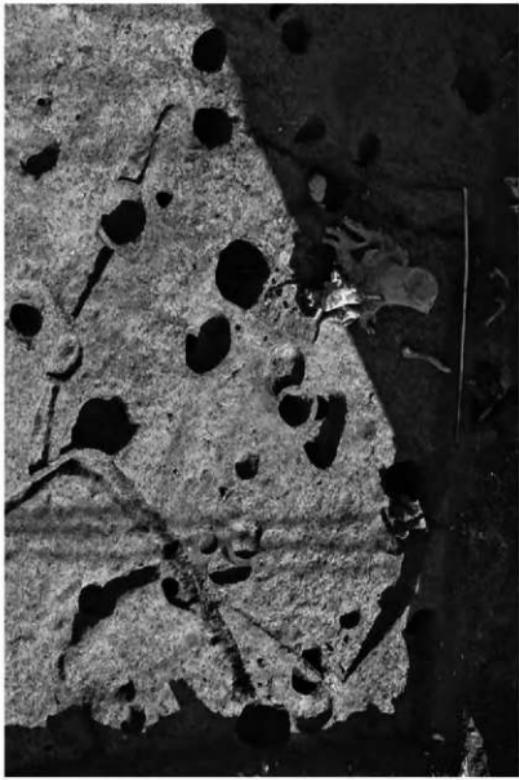


1) 6号住居貼床断面(北から)

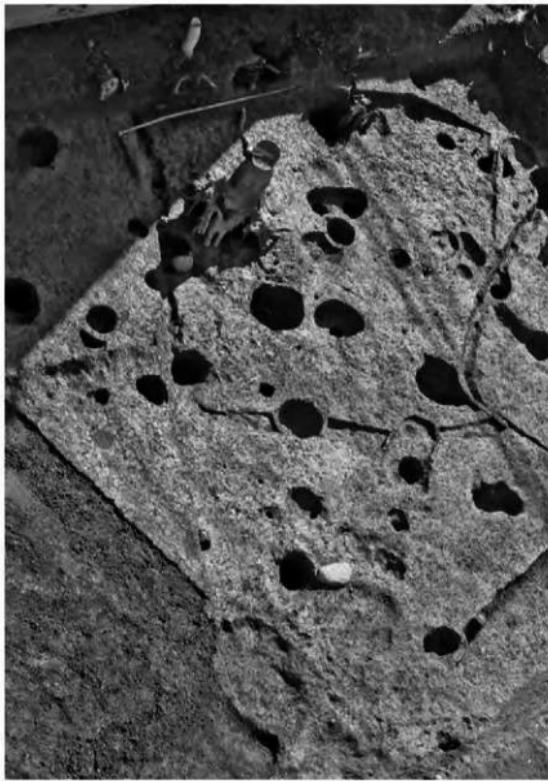


2) 6号住居炉土層断面(東から)

2) 23号住居(北から)



1) 23・26号住居(東から)





1 ) 23号住居貼床断面(西から)



2 ) 24号土壤(北から)



1) 2号住居(北から)



2) 4号住居(北から)



1) 4号住居遺物出土状況(北から)



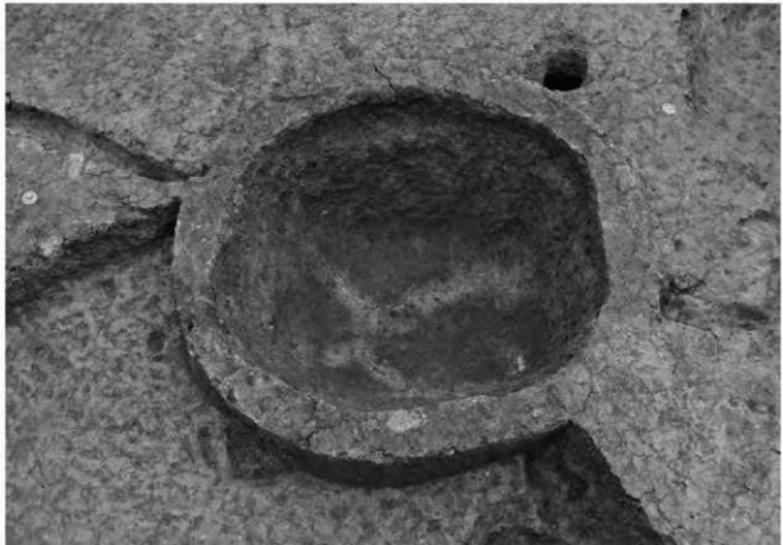
2) 23・27号住居(東から)



1) 27号住居(北から)



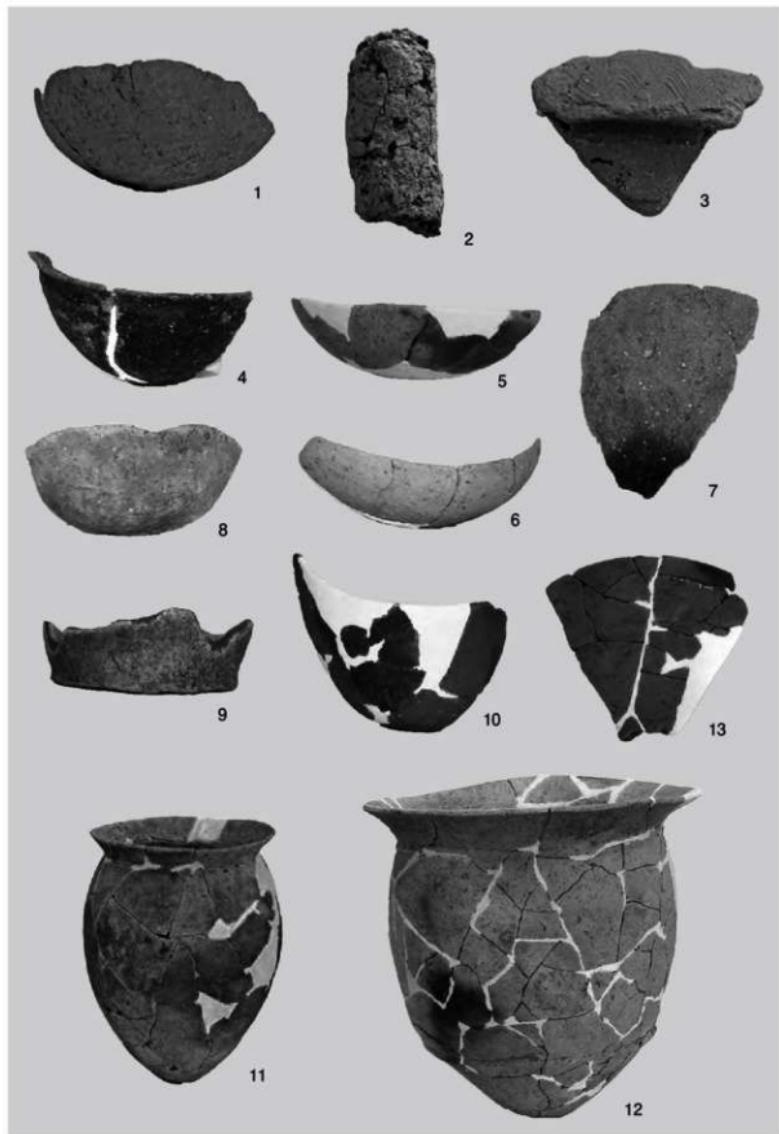
2) 26・34号住居(東から)



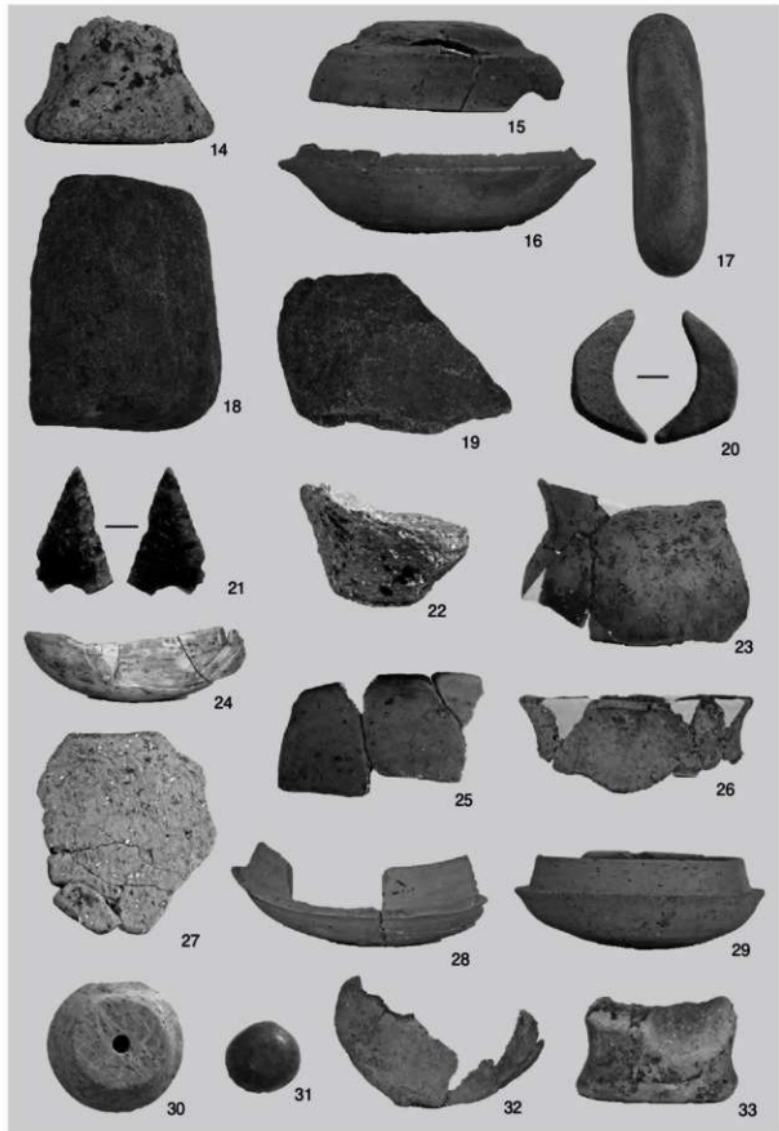
1) 5号土壤(北から)



2) 13号土壤(西から)



出土遺物 1 (縮尺不同)



出土遺物 2 (縮尺不同)

## 報告書抄録

ふりがな	さんのういせき							
書名	山王遺跡 7							
副書名	山王遺跡第8次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1283集							
編著者名	小林義彦							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2016年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード	北緯	東經	発掘期間	発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘原因	
山王遺跡 第8次調査	市町村 福岡市博多区 山王二丁目43番2	40130	2379	33° 34' 18"	130° 26' 19"	20141006 ～ 20141126	165	記録保存 調査
所 収 遺 跡 名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
山王遺跡第8次調査	集落	弥生時代後期 ～ 古墳時代後期	堅穴住居、土壙、 ビット	弥生土器(釜、鉢、器台、 高杯) 須恵器壺、滑石製紡錘車				
要約	山王遺跡は、福岡平野の東部を蛇行しながら北流して博多湾に注ぐ御笠川の下流域左岸にある低丘陵上に立地し、開析谷を隔てた西には、比恵遺跡群が広がっている。第8次調査区は、この山王遺跡の南西縁に位置し、開析谷を隔てた西には環濠集落遺構として報告されている比恵遺跡群第1次調査区がある。本調査では、弥生時代後期と古墳時代後期の堅穴住居(9棟)や土壙(4基)のほかに柱穴などを検出したが、掘立柱建築としてはまとまらなかった。調査区の中央部で検出した6号住居(SC-06)は、長辺が700cm、短辺が525cmの大型の住居で、覆高も50cmと高い。この住居の西壁を除く三方には、幅が90~110cm、高さが30cmのベッド状遺構が通り、西壁の中央部には、出入り口に設置した梯子状の部材を固定したと考えられる柱穴が掘り込まれている。また、床面の中央部に炉があり、それよりやや東に寄った対椅位に2本の主柱穴を掘り込んでいる。この主柱穴には、切り合があり、建て替えが行われたことが窺える。弥生時代後期の大型住居の検出は、定型的な堅穴住居の枠を越えたもので、集落内における何らかの意味を窺わせる。							

### 山王遺跡

- 山王遺跡第8次調査報告 -  
福岡市埋蔵文化財調査報告第1283集

2016年（平成28年）3月25日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印刷 株式会社博多印刷

福岡市博多区須崎町8-5